目　次

1．総説　和鏡鑑賞の手引き　川見典久　003

2．図版　013

3．図像でたどる千歳のねがい　122

4．参考文献　140

5．掲載作品目録　142

凡　例

・本図録は第 124 回展観「和鏡賞鏡―図像でたどる千歳のねがい―」（会期 2020 年 10 月 17 日～ 11 月 29 日）にあわせて編集、発行した。ただし、展覧会の総目録としてではなく、掲載作品を絞ることで部分拡大や角度の異なる画像を増やし、鏡の細部を確認しやすいように配慮した。

・図版については、番号、作品名、法量、製作年代、所蔵者の順に記した。なお、限られた紙数のなかで出来る限り見やすくするために、実寸の大小にかかわらず、図版の大きさを一定にした。

・図版はすべて深井純氏の撮影による。

・史料を引用する場合は、漢文体を書き下し文にあらためた。

・本図録の執筆・編集は研究員の川見典久、画像処理・加工・レイアウトは柴千裕が担当した。

総説　和鏡鑑賞の手引き

川見　典久

はじめに

古代以来、鏡には自らの姿を映すだけでなく、王権の象徴としての意味や、信仰と関わる用途があった。その製作は中国鏡を模倣することにより発展し、古墳などからの出土鏡や正倉院宝物として伝来した国産鏡に、その形式に倣った作例を見ることができる。なかには不整合な図像構成や文様表現が厳格でないものも散見され、当時の人びとが中国への強い関心を抱き、その技術や文化を習得しようと苦心したことが伝わってくる。

唐王朝の衰退した平安時代には、そのような模倣を徐々に脱して、日本の情景や草花、鳥、虫などを絵画的な構図や描線で生き生きと表現する和様の鏡が生まれた。唐様式のうち日本人の好みに合うものを継承し、宋代以降の影響を受けつつ、工芸意匠として発展したのである。同様の意匠は絵巻物の描写や経典・古筆の料紙、蒔絵箱の装飾などにも広く見られ、同時代の美術工芸全体に通じる変化であったことが窺える。

以降、約千年にわたってほとんど途切れることなく作例を通覧することができる和鏡は、金工史にとどまらず、日本の美術史を考えるうえで重要な資料と言えよう。特に絵画・工芸作品の残存数が多いとは言えない中世（12 世紀後半～ 16 世紀後半）の美術を語るには欠かせない分野であり、その意匠からは中世人の信仰や美意識を窺うことができる。日本美術史上の優品として取り上げるべき作品も少なくない。戦前から廣瀬都巽をはじめとする研究があり、近年は美術史のみならず、考古学からのアプローチも増えたものの、これまでその資料性に見合うほどの注目がされてきたとは言えない。中世を通じて幅広く作例を通覧できる出版物は限られており、美術全集にもわずかな資料しか収録されていない。目に触れる機会が少ないので、金工以外の美術史研究に用いられることはほとんどないのが現状であろう。

そこでこの図録では、平安時代から室町時代の和鏡を取り上げ、その背面の意匠に注目して、どのような構図や文様構成があるのか、どのようなモチーフが採用されているのか、図版を通して一覧できるように意図した。さらに巻末には、代表的な意匠の意味について参考となる作例と史料を引用した解説を付し、その歴史的、信仰的な背景を探る手掛かりとなるようにした。すべての作品図版にはひとつひとつの鏡背文様の表現や技術を確認できるよう拡大画像を掲載しており、細部までじっくりと観察していただければ、当時の優れたものづくりの技術や精神、人びとの美意識を看取できるであろう。幅広い分野の研究者、美術愛好家に本書を利用していただければ幸いである。

■形式

和鏡の多くは円形で、他に方形や花弁の先が尖った稜花形（菱花形）、花弁の先がまるい輪花形（葵花形）などがある（**図 1**）。また、中世末期になると持ち手を付けた柄鏡があらわれ、江戸時代にはこれが一般的となる。

稜花形・輪花形の鏡はペルシアの工芸にみられる花文様をもとにした形式で、唐時代に流行したことから、日本でもその影響を受けて作られたことが、正倉院宝物や各地の出土品からわかる。平安時代になると瑞花や鳳凰、鴛鴦など文様の形態は著しく和様化するものの、錫を多

1. 瑞花鴛鴦文八稜鏡

ずいかえんおうもんはちりょうきょう

径 15.0㎝　　平安時代（11 世紀）　　黒川古文化研究所

31. 愛染明王蓬莱文鏡
あいぜんみょうおうほうらいもんきょう

径 11.3㎝　　室町時代（15 世紀）　　北島古美術研究所

32. 愛染明王蓬莱文鏡
あいぜんみょうおうほうらいもんきょう

径 11.4㎝　　室町時代（16 世紀）　　黒川古文化研究所

47.　和鏡鋳型 平安京左京八条三坊九町出土

平安時代（11 ～ 12 世紀） 京都市

報告：『平安京左京八条三坊九・十町―七条町の調査―』
（古代文化調査会、2007 年）

■和様の展開

【概要】

平安後期以降、和鏡の背面には、水辺に葦が繁り、千鳥や鴨、鶴が遊ぶ情景を絵画的にあらわした図様が増え、植物の散らし文様や片輪車のような幾何学的な意匠も、中国鏡のような厳格な割り付けをおこなわなくなる。簡素な描写ながら、鳥の姿なども生き生きとあらわされており、日本人の美意識にもとづいて鏡が作られるようになったことがわかる。同じような文様は蒔絵や料紙装飾など他の工芸品にもみられ（**挿図１～４**）、これが和鏡のみの変化ではなかったことがうかがえ、屏風や障子、絵巻などに描かれた「やまと絵」とも深く関わっている。

このような文様が成立した背景にある当時の美意識は、「幽玄」や「余情」、「艶」、「優美」、「もののあわれ」などと称される。これらは和歌論のなかで語られ、たとえば鴨長明（1155～1216）は「歌姿」（和歌の形式）・「幽玄の体」について、「言葉に現れぬ余情（よせい）」（言葉のかたちで表現されない美的情趣）、「姿に見えぬ景気」（視覚的に把握できない気配、様子、イメージ）、「艶」（はなやかな美しさ）などを重要視する。これといった色も音もない秋の夕暮れの空を見て、わけもなく涙がこぼれるような状況を具体例として挙げ、このような情趣を理解せず、ただ桜や紅葉のような美しさのみを希求する人びとを批判する（**資料１**）。藤原俊成（1114～1204）も歌は「艶」にも「幽玄」にも聞こえるべきで、いい歌には詞や姿のほかに「景気」がともなうと述べる（**資料２**）。さらに俊成の子である定家は、「やさしくものあわれに詠むべき」と言う（**資料３**）。「ものあわれ」や「もののあはれを知る」（**資料４**）ことも重視された美意識であった。当時の和歌は屏風や障子に描かれた花鳥画、名所図を題材として詠むことも多く、それを色紙に書して貼り付けたことも知られる。絵画と和歌が一体のものとして深く関わっており、工芸の意匠にもそのような意識が反映されたことは想像に難くない。

和鏡のほぼすべてには千鳥や鴨、鶴、雀など、何らかの鳥がつがいであらわされる。たとえば中国において鴛鴦は常に雌雄がともに行動する鳥として知られ、片方を狩るともう一方は死んでしまうといわれる（**資料５**）。また離ればなれになる夫婦が鏡を二つに割ってそれぞれを所持することとしたが、妻が浮気をすると彼女が持っていた半鏡が鵲となって夫のもとへ飛び去ったとの話も伝わる（**資料６**）。後世、この逸話に因んで鵲を鏡の背面文様としたとあるが、月宮に向かって飛ぶ二羽の鵲をあらわした唐鏡が知られる（**挿図５**）。このように中国において鳥は夫婦円満や男女の仲介を象徴しており、唐代にはそれらを文様とする鏡が盛行したことが遺品からうかがえる（**挿図６**）。わが国ではこの思想が特に共感をあつめ、鏡背文様における定式となった。

鳥とともにあらわされる植物は、梅や松、藤、山吹、萩、薄、女郎花（おみなえし）、撫子（なでしこ）、菊など、和歌に詠まれたものと共通点が多いが、桜や紅葉がほとんど見られないことには注意を要する。わずかな期間で散ってしまう桜や、秋に葉の色が変わる紅葉は、季節を感じ人生を儚んで歌に詠みこそすれ、長寿や繁栄などの願いを込める鏡の文様としては避けられたのであろう。

鎌倉時代になると、洲浜に生えた植物が凸圏に沿って左上へと伸び、そのまわりに鳥や蝶が遊ぶ典型的な図様が成立する。たとえば「秋草双雀文鏡」（**図版 12**）は、洲浜から生える萩と薄、その間に遊ぶ二羽の雀を描き、洲浜下の外区に寄せる波をあらわす。他にも秋草を菊花や梅樹、松藤とする同様の構図を有する作品や、籬や桧垣を配するものが数多く見られる（**図版 13～16**）。この背景には、自然の景色や貴族の庭園の造作、それらをもとにした絵画のみならず、歌合などに際して製作された「洲浜」や「山形」などの飾りがあると考えられよう。たとえば、藤原師輔（908～960）『九条殿記』には、天暦七年（953）十月二十八日の内裏菊合において作られた、菊を植えた洲浜に関する記述がある（**資料７**）。

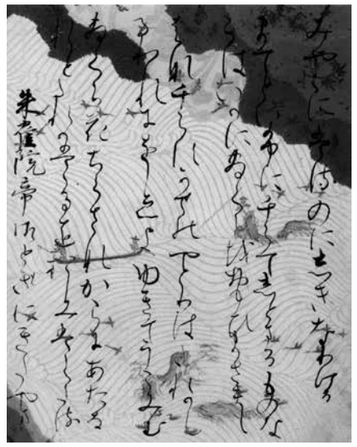
まず、左方は沈香で舟橋を作って銀の双鶴を置き、一羽には葉に和歌を書いた菊一枝をくわえさせる。洲浜には辛崎沙を敷き、ところどころに水晶を加え、底に錫を敷いて水を湛えた。一方、右方は洲浜に沈香、銀、蘇芳を副木とする菊三本を栽え、鏡を水の代わりとした。こちらも銀の鶴には葉に和歌を書いた銀製の花をくわえさせる。春日大社に伝わる、洲浜形の上に立つ鶴二羽をあらわした「銀鶴及び磯形」などが参考になろう（**挿図７、８**）。

また『栄花物語』によれば、康保三年（966）閏八月十五日

挿図１　蒔絵箏（部分）　本宮御料古神宝類
平安時代　長 152.0㎝　幅 26.5㎝
春日大社　国宝

挿図２　同　緑地彩絵琴箱（蓋裏　部分）　国宝

挿図３　三十六人家集　能宣集上　平安時代
20.0 × 31.4㎝　本願寺　国宝



挿図４　三十六人家集　素性集（部分）　平安時代
20.0 × 31.4㎝　本願寺　国宝

挿図５　双鵲月宮龍文八花鏡　陝西省商県出土
唐時代　径 15.3㎝　陝西歴史博物館

挿図６　双鶴対鴻文八花鏡（部分）　唐時代
径 21.8㎝　黒川古文化研究所

掲載作品目録

番号	名称	法量	時代	所蔵
1	瑞花鴛鴦文八稜鏡	径 15.0㎝	平安時代（11 世紀）	黒川古文化研究所
2	瑞花鴛鴦文八稜鏡	径 13.9㎝	平安時代（11 世紀）	黒川古文化研究所
3	松喰鶴文鏡	径 10.5㎝	平安時代（12 世紀）	黒川古文化研究所
4	松喰鶴文鏡	径 11.4㎝	平安時代（12 世紀）	黒川古文化研究所
5	流水飛鴨文鏡	径 10.7㎝	平安時代（12 世紀）	黒川古文化研究所
6	流水千鳥文鏡	径 10.5㎝	平安時代（12 世紀）	黒川古文化研究所
7	流水千鳥文鏡	径 10.0㎝	平安時代（12 世紀）	黒川古文化研究所
8	流水千鳥文鏡	径 11.1㎝	平安時代（12 世紀）	黒川古文化研究所
9	秋草蝶鳥文鏡　白川金色院跡出土	径 11.7㎝	平安時代（12 世紀）	宇治市
10	山吹双鳥文鏡　白川金色院跡出土	径 10.8㎝	平安時代（12 世紀）	宇治市
11	撫子鳥虫文鏡	径 11.0㎝	平安～鎌倉時代（12 ～ 13 世紀）	黒川古文化研究所
12	洲浜秋草双鳥文鏡	径 11.4㎝	鎌倉時代（13 世紀）	黒川古文化研究所
13	洲浜秋草双鳥文鏡	径 11.8㎝	鎌倉時代（13 世紀）	北島古美術研究所
14	籬秋草双鳥文鏡	径 11.1㎝	鎌倉時代（13 世紀）	北島古美術研究所
15	洲浜松藤双鳥文鏡	径 11.6㎝	鎌倉時代（13 世紀）	北島古美術研究所
16	洲浜菊花双鳥文鏡	径 11.3㎝	鎌倉時代（13 世紀）	黒川古文化研究所
17	山吹散双鳥文鏡	径 11.0㎝	鎌倉時代（13 世紀）	黒川古文化研究所
18	荒磯千鳥文鏡	径 9.8㎝	鎌倉時代（13 世紀）	黒川古文化研究所
19	亀甲双鳥文鏡	径 11.1㎝	鎌倉～室町時代（14 世紀）	黒川古文化研究所
20	洲浜牡丹双鳥文鏡	径 18.9㎝	鎌倉～室町時代（14 世紀）	北島古美術研究所
21	洲浜牡丹双鳥文鏡	径 20.4㎝	室町時代（15 世紀）	北島古美術研究所
22	蓬莱文鏡	径 11.1㎝	鎌倉～室町時代（14 世紀）	黒川古文化研究所
23	蓬莱文鏡	径 19.7㎝	鎌倉～室町時代（14 世紀）	黒川古文化研究所
24	蓬莱文鏡	径 9.1㎝	室町時代（15 世紀）	黒川古文化研究所
25	蓬莱文鏡	径 16.5㎝	室町時代（15 世紀）	北島古美術研究所

番号	名称	法量	時代	所蔵
26	蓬莱文鏡	径 17.4㎝	室町時代（15 世紀）	黒川古文化研究所
27	愛染明王菊花散双鳥文鏡	径 10.8㎝	室町時代（15 世紀）	黒川古文化研究所
28	愛染明王柏楓双鳥文鏡	径 11.6㎝	室町時代（15 世紀）	黒川古文化研究所
29	愛染明王菊枝散双鳥文鏡	径 11.6㎝	室町時代（15 世紀）	黒川古文化研究所
30	愛染明王蓬莱文鏡	径 11.5㎝	鎌倉～室町時代（14 世紀）	黒川古文化研究所
31	愛染明王蓬莱文鏡	径 11.3㎝	室町時代（15 世紀）	北島古美術研究所
32	愛染明王蓬莱文鏡	径 11.4㎝	室町時代（16 世紀）	黒川古文化研究所
33	鳥居社殿双鳥文鏡	径 10.9㎝	室町時代（15 世紀）	北島古美術研究所
34	鳥居社殿双鳥文鏡	径 11.2㎝	室町時代（15 世紀）	北島古美術研究所
35	松樹社殿双鳥文鏡	径 11.3㎝	室町時代（15 世紀）	北島古美術研究所
36	帆船山水双鳥文鏡	径 11.4㎝	室町時代（15 世紀）	北島古美術研究所
37	松樹山水双鳥文鏡	径 11.4㎝	室町時代（15 ～ 16 世紀）	北島古美術研究所
38	龍宮文鏡	径 11.2㎝	室町時代（15 世紀）	黒川古文化研究所
39	龍宮文鏡	径 10.9㎝	室町時代（15 世紀）	黒川古文化研究所
40	松散双鳥文鏡	径 9.9㎝	室町時代（15 世紀）	北島古美術研究所
41	松丸双鳥文鏡	径 11.1㎝	室町時代（15 世紀）	北島古美術研究所
42	蝶々双鶴文鏡	径 23.1㎝	室町時代（15 世紀）	黒川古文化研究所
43	流水水車鶴孔雀文鏡	径 11.3㎝	室町時代（15 ～ 16 世紀）	黒川古文化研究所
44	籬菊花鶴亀文鏡	径 11.5㎝	室町時代（16 世紀）	黒川古文化研究所
45	瑞花双鳳文八稜鏡	径 12.5㎝	室町時代（15 ～ 16 世紀）	北島古美術研究所
46	松竹双鶴文柄鏡	8.6 × 18.3㎝	室町時代（16 世紀）	北島古美術研究所
47	和鏡鋳型　平安京左京八条三坊九町出土		平安時代（11 ～ 12 世紀）	京都市
48	和鏡鋳型　平安京左京八条三坊六町・十一町出土		鎌倉時代（13 ～ 14 世紀）	京都市考古資料館
49	和鏡鋳型　平安京左京八条二坊十四・十五町出土		鎌倉時代（13 ～ 14 世紀）	京都市考古資料館
50	和鏡鋳型　平安京左京四条三坊四町（烏丸綾小路遺跡）出土		室町時代（15 ～ 16 世紀）	京都市